論　文

ルイジアナ近代美術館における「子どもハウス」
― 家族参加型プログラムの試み　自由制作のスタジオから ―

木　下　　綾*

1．はじめに

ルイジアナ近代美術館Louisiana Museum for Moderne Kunst（以下ルイジアナ）は，1958年の開館時からビジターの視点を重視した経営を行うことで評価されている「ビジター指向の美術館」である[木下 2006]。家族，若者，老夫婦，旅行者，学生など，特に夏のルイジアナは閉館間際まで賑わいをみせる。オアスン海峡を臨むカフェや彫刻庭園，定期的に演奏会が開かれるコンサート・ホールなどが併設され，美術愛好家だけでなく幅広いビジター層が楽しめる美術館である。「子どもハウスBørnehus」もそうしたルイジアナを特徴づける施設の一つである。

博物館全般におけるビジターについていえば家族(1)の割合は高い。だが美術館に限って言えば，比較的その割合は低い[フォーク，ディアーキング 1996: 29](2)。美術館にとって家族の訪問を増やすことは，ビジターの拡大につながる。そして子どもに美術学習の機会を与えることにもなる。子どもの美術への関心が高まれば，次世代ビジターの育成にもなるだろう。

「子どもハウス」は子どもだけが対象ではない。一緒に訪れる大人と共に家族で参加できるプログラムを実施している。そこで本論文は，世界有数のジャコメッティ作品やムーアやカルダーによる野外彫刻を始めとするコレクションそして時代の先端をとらえる企画展でアート界の専門家から高い評価を得ているだけでなく，幅広いビジターの獲得にも成功しているルイジアナを事例に取り上げる。そして家族に人気の「子どもハウス」で行われている「家族参加型プロブラム」のフィールド調査に基づき，このプログラムが家族の訪問を増やすことにとって，また子どもの美術学習の機会を増やすことにとって有効な手段であることを明らかにすることを目的とする。

2．家族参加型プログラム

家族参加型プログラムが利用される背景として，博物館の機能と認識されるようになったコミュニケーションについて概観する必要があろう。まず，この比較的新しい機能を博物館学的視点から捉えてみる。次に，ビジターが求めるものにコミュニケーション機能が認められるか検討したい。そして家族参加型がコミュニケーション理論や構成主義という学習理論に支えられていることを見ることにする。

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　博士後期課程1年

2-1．博物館のコミュニケーション機能

博物館にとって，他のレジャー施設との競合や助成金獲得のため，社会における存在意義の確立・向上が課題となっている。そのためビジターへの新たなアプローチの必要性を認識し，一方的な展示や解説ではなく双方向のコミュニケーションを重視する傾向にある。まず，美術館も含む「博物館」の定義に，機能としてのコミュニケーションを確認する。

コミュニケーションへの意識の高まりは，ユネスコと協力関係にある国際博物館会議International Council of Museums（以下ICOM）の定義に見られる。1946年のICOM設立以降改定を重ねており，現在も定義については改定作業が進行中であることが報告されている[Murphy 2004: 3; イコム日本委員会 2006: 8]が，1974年に改定された現行の定義には「博物館は，社会とその発展に貢献する非営利の常設機関であり公衆に開かれ，人間とその環境に関する物的資料を調査，教育，楽しみの目的のために，取得，保存，研究，伝達，展示する」[Murphy 2004: 3]とある。1961年の定義で用いられていた「保存し陳列する」[ICOM 2001]が「取得，保存，研究，伝達，展示する」となり，「伝達する」にはcommunicateを用いている点に注目したい。1974年の改定は，1968年の5月革命を受けて行われたICOMの組織変革(3)と共に実施された。そして博物館の姿勢として「社会とその発展に貢献する」と明記し，社会に対しコミュニケーションを図ることを機能の一つとした。

2001年施行のデンマークの博物館法Lov nr. 473 af 7. juni 2001, Museumslov [Kulturministeriet 2001]では，「博物館は収集，登録，保存，研究，コミュニケーションを通し，ⅰ．デンマークの文化遺産と自然遺産を保護し，ⅱ．文化的，自然的，美術的歴史を解説し，ⅲ．各専門分野におけるコレクションと資料を発展させ，ⅳ．コレクションと資料を一般市民が利用出来るようにし，ⅴ．コレクションと資料を研究の利用に供し，その研究成果を伝達する」としている。このコミュニケーションには博物館の基本的機能とされる展示や教育も含まれていると理解できる。それは，以下に見るVan Menschのコミュニケーション機能の概念に近いものである。

Weil[2004: 74-79]は，1970年のNobleによる『ミュージアム・マニフェスト』で提示された「収集，保存，研究，解説，展示」という5機能から，Van Menschによる「保存，研究，コミュニケーション」の3機能へのシフトに博物館の新たなパラダイムを見出した。「収集」は「保存」過程の一段階と見なされ，解説と展示は「コミュニケーション」に含まれることになる。解説と展示は表裏一体であり，解説を行う教育部と展示を行う学芸部の協力の必要性が認識されてきた状況を反映しているといえる。Weilは博物館からビジターに向けたメッセージの一方向的「送信transmission」ではビジターの価値観や能力を認めていないと指摘する。さらに博物館とビジターの間だけでなく，ビジター間のコミュニケーションも含む体験の提供も視野に入れている。「博物館のプログラムがビジターの人生になにがしか有意義な影響を与えているか。…その結果は博物館の努力だけで達成されるのか，それともビジターと協力して達成するととらえるのか。そしてビジターだけが対象なのか，…あるいは対象をコミュニティーまで広

げるべきか。それならば，どういった面で，どこまでを対象に，何を目的にするのか」[Weil 2004: 79]とコミュニケーション機能の広範な可能性を示唆している。本稿では，Weilの観点から，美術館のコミュニケーション機能とは，ビジターが交流し積極的に学ぶことを促すことであり，ビジター，美術館職員，芸術家など人びとの間はもとより，ローカル・コミュニティーやグローバル・コミュニティーと美術館の間でも生じる双方向のコミュニケーションを行うことであると考える。

２－２．ビジターの目的

博物館のビジター研究は，1916年 Gilmanがビジター行動の調査から「博物館疲労」[(4)]について発表して以来，人口統計的調査，展覧会評価に関する調査，ビジター体験の質的調査など異なる目的や方法で実施されてきた[Screven 1993]。そうした研究の結果，ビジターとは所得水準，教育水準，文化的背景，エスニシティー，ライフスタイル，ジェンダーなど社会的要素が影響している多様な存在であり，博物館に求めることも多様であることが明らかになってきた。

ビジターだけでなくノン・ビジターも対象に，「美術館になぜ人が訪れるのか，あるいは訪れないのか」をHood [1983]は調査した。先行研究をもとに博物館訪問を含む余暇活動に満足をもたらす要因を６つに絞り，それらをもとに美術館に来る人と来ない人が重視する要因を特定した。社会的交流，やりがいのある事をする，くつろげる環境，新たな体験への挑戦，積極的な参加，学習の機会という６要因である。対象としたトリド美術館[(5)]地域の頻繁に訪れるビジター（年に３回以上），たまに訪れるビジター（年に１～２回），そしてノン・ビジターが高く評価する要因には二つの傾向があった。頻繁に訪れるビジターにとって美術館は６要因とも満たす施設であったが，特に重視するのは学習，挑戦，やりがいであった。このビジター層はトリド市人口の14％である。対照的に，たまに訪れるビジターとノン・ビジターの評価する要因は同様の傾向にあり，社会的交流，参加，くつろげる環境であった。彼らはトリド市人口の86％を占める。また彼らにとって重要なのは，家族で楽しめるイベントであった。一部の熱心な美術ファンでない限り，つまり多数の人にとって家族や友人との社会的交流，参加，くつろぎというのが美術館を訪問する目的となりうる。特に社会的交流や参加という目的は美術館のコミュニケーション機能によって達成されると考えられよう。

２－３．「家族参加型」と学習理論

家族という社会的集団で参加することにはどういった効果が期待できるのであろうか。家族参加型プログラムを支える理論的枠組みは，構成主義という学習理論にあるといえる。構成主義とは，学習者が自ら意味を構成するという考えである[Hein 1992]。博物館において，ビジターは能動的に，個人の体験そして自分の属する家族や学校といった社会的集団の価値に基づいて意味を構成する[Hein 1992]。

Hooper-Greenhill[2000]によると，この理論はCareyの コミュニケーション理論と共通する点がある。Carey[1992]は「送信的コミュニケーション」と「儀礼的コミュニケーション」というコミュニケーションに関して２つのアプロー

チがあることを示した。「送信的コミュニケーション」は「知らせる」「送る」「送信する」「他者に情報を与える」といった言葉で定義される。つまり，モノの移動のように情報の移動をコミュニケーションととらえる。一方「儀礼的コミュニケーション」は，「共有する」「参加」「連合」「仲間」「共通認識」といった言葉で表される。社会的集団の中でコミュニケーションは現実を生み出し，維持し，修正し，変化させてゆくものとし，現実はモノのように外から与えられるものではないとする。構成主義における意味の構成過程は「儀礼的コミュニケーション」に基づいていると考えられる。

家族参加型プログラムはビジターが，家族を基盤に能動的に意味を構成することを促進すると同時に，社会的交流や参加というビジターの目的を満たすということではないだろうか。

博物館における家族行動の研究は，「会話は，家族にとって共有できる展示の意味を探すために中心的な役割をはたしている」[フォーク，ディアーキング 1996: 61]という視点で見学中の会話に注意が注がれて来た。本稿では，美術館における家族を対象とした場合，鑑賞中の会話だけでなく，作品制作というアウトプット過程における家族の「交流」と「参加」の機会も重要と考える。

3．ルイジアナと「子どもハウス」の成り立ち

ルイジアナ近代美術館は，1958年にクヌド・W・イェンセンKnud W. Jensenにより「近代美術を身近に感じられる環境」[Louisiana 1995b: 10]としてコペンハーゲン郊外に創設された。「風景と建築とアートの関係」[Louisiana 1995b: 7]を重視した空間作りは，ビジターの博物館疲労の防止にもなっている[木下 2006]。屋外の風景に開かれた展示室だけでなく，彫刻がゆったりと設置された庭園でも作品を鑑賞し，散歩しながら子どもを遊ばせ，海を臨むカフェで食事をし，「子どもハウス」で作品づくりに挑戦することもできる。家族で一日飽きることなく過ごせる場所といえよう。今日，子ども用の施設やプログラムを用意している美術館は増えているが，ルイジアナの1994年に開設された「子どもハウス」のように常時利用出来る施設はまだ多くない(6)。このようなユニークなスペースとプログラムができるまでの段階と根底にある理念を振り返っておく。

3－1．ルイジアナの子ども観

ルイジアナの創設者イェンセンは，ビジターに対して「ゲスト（お客様）」として接する事を職員に求め，「喜びを与える場」となることを考えた[Vejlstrup 2002]。開館当時のポスター[Louisiana 1958]には木立と美術館が写った大きい写真の下，文字は非常に限られているが，住所の横に「カフェテリア・公園」と明記されている。美術作品をアピールするのではなく，環境が素晴らしいので行ってみたいという気を起こさせ，美術に感心の無い人びとにこそ来場してもらい喜びを感じてもらおうとする姿勢があった。Vejlstrup[2002]は，「50年前，少なくとも近代美術を扱う場合，あらゆるビジター層を狙うというのは常識的ではなかった。（しかし）もし対象をデンマークの文化的エリートに絞っていたら，美術館はこんなに長続きは出来なかっただろう」と指摘する。そしてルイジアナは音楽や演劇，ダンス，映画，文学など多分

野のイベントを行うことにより，幅の広いビジター層が訪れる「出会いの場」となる[Louisiana 1995b, Vejlstrup 2002]。ルイジアナの考える多様なビジターの中でもターゲット・グループとして重視されたのは，子どもであった。「子どもは世界で最も抑圧された少数民族ではないかと思う時がある」[Weschler 1982: 56]と語るイェンセンは，子どもが飽きないで楽しみ参加できるプログラムを用意した。そして，子どもが早いうちにアートに出会うことで，将来のビジター育成にもつながると考えた[Vejlstrup 2002]。実際子どもの頃ルイジアナを体験した人びとが祖父母として孫を連れて来ている[Vejlstrup 2002]ことからもわかるように，それは現実となっている。

開館から30年以上経て，「子ども達がアートについて学び，アートを用いた表現も出来る場」[Louisiana 1998: 23]を新たに開設するに至る。キュレーター，トーヴァ・ヴァイストロップTove Vejlstrupによれば，ルイジアナの発展は常にスペースの不足に起因しており，「子どもハウス」の開設もそのひとつだそうだ。上記の通りルイジアナの理念に当初からあったものがスペース対策を契機に新たな施設として実現されたといえるかもしれない。しかし，後述するように1970年代から1990年代はデンマークにおいて子どもや家族に関する政策が整備された時代であったことは思い出す必要があるだろう。

３－２．ルイジアナ開館から「子どもハウス」開設まで

1958年の美術館開館時には，エントランス左手に「子どもの部屋」が設けられた。子ども達がテーブルを囲み，お絵かきができるようになっていた。また，現在も行われている童話の朗読も始まっていたそうである。当時の入場料は，大人２デンマーク・クローネ（以下クローネ）で，16歳未満の入場料は無料[Louisiana 1958]であった。開館から「子どもハウス」開設までの36年の間には，子ども向けの展覧会やイベントが開催されている（表１）。

表１　「子どもハウス」に関する年譜

1958年	美術館開館　「子どもの部屋」併設 16歳未満入場無料（大人　2DKK）
1978年	「子ども達という民族」展 「世界の子どもたちはいま」展 （国際児童年写真展）同時開催 「湖公園」開設
1979年	「湖公園」閉鎖
1984年	「子どもウィークエンド」
1987年	「子どもデイ」
1994年	「子どもハウス」開設 ４歳～16歳入場料　15DKK （大人45DKK） 子ども会員制度「モビレン」開始 子ども会員誌「モビレン」年３回発行
1997年	子ども会員制度「モビレン」終了
1998年	「子どもハウス」新プログラム開発
2003年	学習普及部に３セクションが統合
2006年	18歳未満入場無料（大人　80DKK）

ルイジアナ美術館刊行物およびインタビューをもとに作成（DKK: デンマーク・クローネ）

毎年一人の芸術家を招いて地元フムレベックの子ども達と作品を製作するのが夏の恒例となり，1978年にはそれを拡大して展覧会へ発展した[Weschler 1982: 58]。約10名の芸術家の協力により「子ども達という民族Børne er et folk」展が開催された。８月26日から10月22日の２ヶ月で16万人動員[Louisiana 1983: 52]という大盛況であった。この展覧会の特徴は，作品は見るものではなく，遊ぶものであったことだろう。子どもたちが動かしたり，中に入ったり，登ったりできる作品が展示室に並んだ。そして屋外

では美術館の北西に位置するフムレベック湖畔の「湖公園Søhaven」に滑り台や小屋，ブランコのような座席に腰掛け200mも空中を移動するロープウェイ，木登りできる大木には大小のハンモック，湖には自分たちの力で渡すいかだ，などが設置された[Weschler 1982: 58-59]。屋外の作品は展覧会後も湖公園の常設作品として子ども達の人気を集めた。しかし対岸にあるフムレベック教会の墓地が湖公園と隣接しており，教会から子ども達の声に対する騒音の苦情があった。翌年９月には湖公園は惜しまれつつ閉鎖されることになった[Louisiana 1979: 3, Weschler 1982: 59]。

また，翌年の1979年は国連の国際児童年にあたり，「世界の子どもたちはいまThe Children of this World」というユニセフによる写真展が「子ども達という民族」展に併せて開催された[Louisiana 1978: 3]。

1984年の「子どもウィークエンド」では，湖公園ではなく中央の彫刻庭園の芝生に空気でふくらませた巨大な遊具が横たわり，木の間には網でできた空中廊下が吊るされ，子ども達がはしゃぎ回る様子や，マジックショーで子どもと大人で満員となった劇場が写真に残っている[Louisiana 1995b: 342-343]。

そして1987年には子ども人権擁護団体である「子どもの環境Børns Vilkar」の協力のもと「子どもデイ」が開催される。入場者数6,000人のうち子どもが４,000人を占めた[Louisiana 1987: 2-3]。「子ども達という民族」展から数点が再び展示され，絵画，工作，パントマイムやダンスなど芸術家によるワークショップも行われた[Louisiana 1987: 2-3]。

３－３．「子どもハウス」開設

このように子ども向けイベントが繰り返された後，1994年ルイジアナにとって７回目の増築が行われ延べ床面積500平方メートル，３階建ての「子どもハウス」が完成する。この建設に当たり，Villum Kann Rasmussen FondenおよびVelux Fondenという同系列の２財団[(7)]が出資した[Louisiana 2006a]。またスタジオの中で使われる文房具や材料は全て文房具店Panduro Hobby社[Louisiana 2006a]が現在も提供している。

「子どもハウス」は既存の建物に寄り添うように増築されているため，展示室をつなぐ廊下の壁面にドアが設けられそのままハウスに直結している。反対側には湖が広がり低地となっており，「子どもハウス」は斜面に建っていることになる。廊下側の入り口が３階にあたり，下に２階，１階と続く。１階からは再び利用可能となった湖公園に出られるようになっている。開設時のスペースの利用は，現在と多少異なる。３階には「スタジオ」と「おはなしの部屋」，２階には「コンピューター・コーナー」と「上映室兼教室」，そして１階には「多目的ルーム」と「子どもカフェ」が設けられた。そして，文化省Kulturministeriet等の補助金により屋外の5,000平方メートルの湖公園は整備され，開設に合わせアルフィオ・ボナーノAlfio Bonannoの新作『鳥の巣』と『フムレ川橋』が設置された[Louisiana 1994a: 3]。

９月17日と18日の週末にはオープニング・イベントが開かれた。プログラムは人形劇からウクライナの子どもビッグバンドのコンサート，子ども番組のテレビ中継まで様々である[Louisiana 1994b: 6-7]。ニューヨーク・タイム

ズはイベントの一場面を，「何千もの風船が空に舞い上がった。そのひとつひとつに子どもの描いた絵と氏名と住所，そして『お手紙下さい！』とメッセージが添えられていた」[Russell 1994: 39]と伝えている。

また，「子どもハウス」開設を機に子ども会員制度「モビレンMobilen」が開始された。1994年の４歳から16歳の子どもの入場料は15クローネ，大人は45クローネである[Louisiana 1994b: 16]。年間100クローネ（子ども二人目からは50クローネ）でモビレンの会員になると，入場料は無料になり，会員誌「モビレン」[8]の送付，有料プログラムやショップでの割引などの特典がある。会員数はスタートして半年で1,000人[Louisiana 1995a: ２]に，1996年には1,700人[9]に達した。

プログラムに関しては，開設から最初の約４年間は芸術家であるリンダ・リルホルLinda Lildholdtが監督した。芸術家達が指導するワークショップが中心であったらしい。1996年に学校プログラムの責任者であるイダ・ブランドホルト・ルンゴIda Brændholt Lundgaardが加わる。高校教師であった彼女を皮切りに教育や美術史の専門家が新しく配属されて行くことになる。1998年にナヤ・ペダーセンNaja Pedersen[10]が「子どもハウス」の責任者となり，ルンゴと共にプログラムを開発していった。その結果，プログラムは展覧会やコレクションの作品と直接関係があるものに絞られた。また，年齢に関係なく自ら理解を促し楽しめるように筆記セットの貸し出しを始めた。Ａ４版サイズの画板，画用紙，鉛筆は，大人でも展示室に持参できる。作品を鑑賞しながら書きとめる感想の言葉や文あるいはスケッチを，作品の理解そして自分の創作へと発展させるためである。これは学校プログラムで特に活用されている。ルンゴが高校教育で用いたプロセス・ライティングの手法を持ち込み美術学習に応用させたそうである。このようにして，「子どもハウス」および学校用のプログラムは教育と美術の専門家を中心に開発されていった。

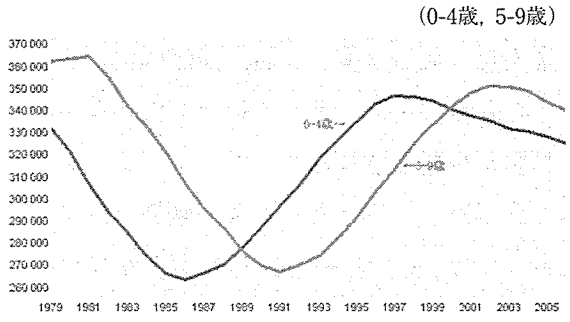
なお，一つつけ加えておく必要のある事実がある。この頃デンマークの合計特殊出生率および出産数が上昇基調にあったという事実である。1983年に1.38と底をついた後，1995年に1.81[11]のピークを迎える。Knudsen[1999]は，この上昇は家族政策が間接的に影響した結果と解釈する。親になる可能性のある人たちが，「子どものいる生活が魅力的な選択肢である」と感じるだけの効果を家族政策があげたと考えられるからである。そして具体的に出産休暇および育児休暇，託児施設，経済的家族支援，家族形態，家族認識，家事分担などに変化が起きたことを指摘している。例えば，産後の出産休暇は1984年には20週間へ，1985年には24週間へ延長された。1984年には産後２週間は，両親共に休暇をとることができ，生後14週以降は母親の代わりに父親が産休をとることも可能になった。また，週の労働時間も1974年に40時間，1987年に39時間，1990年に37時間と短縮されていった[12]。そして1990年代は，家族と共に過ごす時間への意識が高まり，「家族指向の労働市場」として子どもの都合に合わせて夏期休暇が取れるようにするなど政府による計画[Knudsen 1999: 24]が動き出した。

また，家族政策と関連する児童政策の概念は国際児童年（1979年）のあった1970年代に遡ることができる。1979年，国連人権委員会の中に

「児童の権利条約」の作業部会が設置される。そして1989年，児童の生存，発達，保護，参加を保障した「児童の権利条約Convention on the Rights of the Child」[13]が国連総会で採択された。子どもの権利や生活への関心の高まりはデンマークでも見られ，児童期委員会（1976年），家族政策委員会（1980年），青年委員会（1981年），児童期審議会（1988年）など1980年代には14以上の児童に関連する委員会や審議会の活動が始まった[Gauthier 1996: 151, 157]。1988年には児童政策に関する報告書が提出され，特に児童の文化的環境の向上と保育施設の供給と質の改善が強調された[Guthier 1996: 157]。

1970年代，子どもの人権への意識が高まってきた時期に「子ども達という民族」展は開催された。そして1980年代以降，児童政策や家族政策の整備が進み，出生率，出生数とも増え子どもの数も上昇（表２）している。こうした時期に「子どもハウス」は開設された。

表２　デンマーク年齢別人口



出典：Danmarks Statistik (BEF 1 A)

４．「子どもハウス」の現在

４－１．基本情報

2006年，開設から12年を経た子どもハウスは８月13日に「子どもハウス12周年記念」のイベントが行われた。４．では，ルイジアナでのフィールド調査[14]における観察およびインタビューで得た情報を中心に分析する。

現在，ルイジアナの入場料は大人80クローネであり，18才未満は無料[15]である。子どもハウスの利用時間は，美術館の開館時間に準じて毎日10から17時までである。水曜日のみ美術館は22時まで延長開館しているが，子どもハウスは20時までとなっている。

子どもハウスの構成は，入り口のある３階に「スタジオB」[16]と「おはなしの部屋」。２階に「レゴ・コーナー」と「教室」。そして１階に「スタジオA」と「スタジオC」があり，その間の通路に「子どもカフェ」がある。開設時から変化したのは，２階のコンピューターが撤去され，レゴブロックで遊ぶ部屋となり，黄色のブロックが約１メートル四方の木箱一杯に入っており，様々な形が作られテーブルに並んでいる。「教室」は教師向けの講座を行う際，スライド上映などに使用されるらしく，今はあまり子どもの活動に使用されていないようだ。12周年記念イベントの後，この部屋は「椅子デザイン」コンテストの審査会場および撮影会場として使用された。そして１階の湖に面した天井の高い窓の大きな明るいスペースは「スタジオA」として使用されている。「子どもカフェ」は通路部分のカウンターのみに縮小され[17]，奥のスペースは「スタジオC」となった。

また，エレベーターがあるので，車椅子の利用者も１階で子どもと自由制作に参加している姿が見られた。

４－２．組織

この施設で働く職員は学習普及部[18]に所属

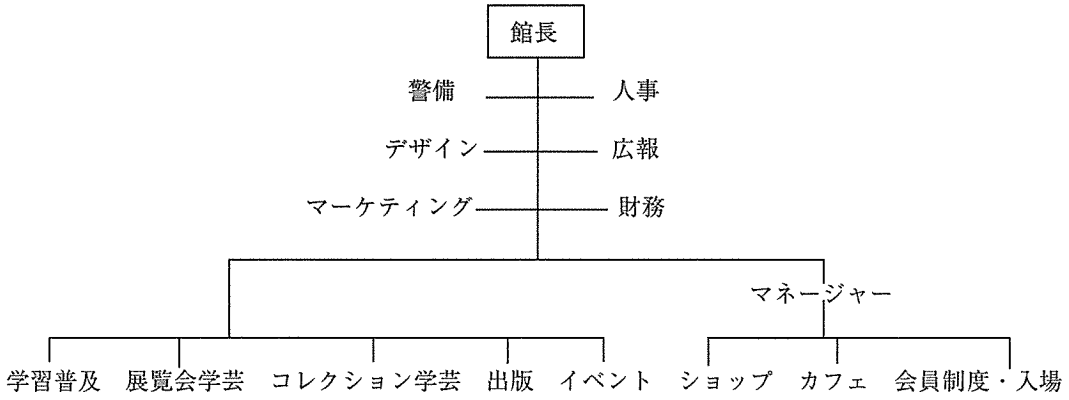


図1　ルイジアナ近代美術館組織図

出典：ルイジアナ近代美術館組織図2004年6月9日版より

する。他の展覧会学芸部，コレクション学芸部，出版部，イベント部と並び美術館のコンテンツを扱う部署の一つである（図1）。

2006年8月現在，学習普及部には9名の職員（内フルタイム3名）および3名の学生が勤務しており，その中で3セクションに分かれている。「子どもハウス」，「学校プログラム」，「成人プログラム」である。「かつて異なる3部門でしたが，3年前に学習普及部に統合されました。毎週水曜日に1時間のミーティングもあり，部内のコミュニケーションが増えお互い協力するようになりました」と語るのは，学校プログラム所属でありながら，子どもハウスの管理や成人プログラムのガイドも担当するメッテ・シモンセン・ニールセンMette Simonsen Nielsenである。ルンゴによると，「その組織再編では，勤務時間の少ない学生ではなくフルタイムの増員も考えていたが，予算上厳しく実現に至らなかった」らしい。ただし，学生は勤務時間が増加され，以前より深く仕事へ関与することが可能となった。

9名の職員は全て女性であり，少なくとも5名は子育てをしている。子どもハウスの職員シャロッテ・ヴィーヨCharlotte Vejøは，子どもハウスに自分も子どもを連れてくる時があるそうだ。また，全員が大学院レベルの課程を修了しているか在籍中である。多くはCand. mag.（candidatus magisterii）またはMag. art.（magister atrium）といった修士号に相当する学位を持ち，その専門（二つ専攻していることが多い）は美術史，美術理論，美術教育，文学，北欧言語学，児童文化，舞台美術，英語，国際政治，工業デザインと幅が広い。そして教育や美術などの職務経験が必要とされるようだ。ルンゴは高校教師であったし，子どもハウスの職員カーン・ビエースゴKaren Bjerresgaardは国立美術館で教育担当やギャラリーでキュレーターの経験がある芸術家である。他にも食器デザイナー，芸術家の助手，赤十字の職員など職歴も様々である。ニールセンのように学生アルバイトから職員になった人もいる。多様なメンバーが同一部内で協力することについて，成人プログラムの責任者リーヌ・エリ・ハイダーLine Ali Chayderは「各スタッフの異なる才能を生かすことになっ

て良い傾向だと思います」と語る。

また，部内のコミュニケーションだけでなく，部署間のコミュニケーションも増えたと指摘する職員も多い。ハイダーは「以前は他の部署が何をしているのか全くわからず，同じ美術館にいながら違う世界にいるようだったが，協力体制が向上した」と言う。特に展覧会を企画する学芸部との連携はまだ発展途上とはいえ，コンタクトがほとんどなかった状態から，情報を共有し効率化を図ることが出来るようになったということである。学習普及部の活動が美術館内で認識されてきたことが要因の一つであるようだ。しかし，展覧会の内容や展示方法について学習普及部から子ども側のニーズを学芸部に伝えるなど課題はあるようである。展覧会で高い位置に展示された作品が子どもから見えない，といったことも起こるからである。

職員のルイジアナに対する意識について質問したところ，成人プログラムの職員トリナ・ホルムTrine Holmは「皆が働きたい所で，応募も多いため優秀な人材が集まるのでしょう」とルイジアナを評価し，「ここで働くことに皆誇りを持っていると思います」と話した。隣にいたビエースゴも「そうね」とうなずいた。また，ハイダーは「給料が他の美術館に比べて高いという訳ではありません。お金のためというより，ライフ・スタイルとしてこの仕事をしています。ルイジアナで働くことに意義を感じます」と語った。

そして，子どもの頃にルイジアナに来たことがあるかという問いには，ルイジアナのあるシェラン島[19]で育った人は来たことがあるという返事だった。ルンゴは，「私だけでなく芸術家や文筆業をしている友達はルイジアナに来た思い出を持っている人が多いです」と語る。ホルムは「子ども達という民族」展での体験を覚えており，「いかだや滑り台があって面白かったわ」と言う。また，ユトランド半島で育ったハイダーは「当時は島を結ぶ橋がなかったので，気軽にこちらに遊びに来ることができなかったのです。18歳になるまでルイジアナに来たことはありませんでした。子どもの頃，親友の家にはいつも変わった展覧会のポスターが飾ってありました。親友のお母さんがルイジアナの会員だったのです。だからウォーホルとかクリストとかルイジアナで開催された展覧会のポスターは印象に残っています」とルイジアナに関心を抱いたきっかけを話してくれた。

学習普及部は多様な分野にわたる専門的な知識と経験だけでなく，ルイジアナに対する誇りや愛着も併せ持つチームといえよう。

４－３．自由制作

子どもハウスのスケジュール表[Louisiana 2006b]によると，2006年８月中に利用できるプログラムは，常時行っている自由制作（無料），毎週日曜日14時から16時のワークショップ（50クローネ。同伴の大人一人分含む），週２日のおはなしの時間（無料。毎週木曜日11時と12時，日曜日12時と13時），４日連続の夏期美術学校（1400クローネ。10時から14時まで），８月13日の「子どもハウス12周年記念」イベント（無料。表３）である。そのうち，子どもハウスの一番の特徴といえるのは，誰もがいつでも好きなだけ無料で参加できる自由制作であろう。

表３　「子どもハウス12周年記念」イベント
2006年８月13日（日）スケジュール

10: 00 - 16: 00	ワークショップ ３スタジオにて
10: 00 - 16: 45	「椅子デザイン」コンテスト
10: 30, 12: 00, 13: 30, 15: 00, 16: 30	彫刻庭園パフォーマンス・ウォーク
11: 00 - 16: 00	湖公演のキャンプファイヤー
11: 15, 12: 45	ファミリー・ガイドツアー
12: 00, 13: 00	おはなしの時間
14:00	ジュースとケーキ
17:00	美術館閉館

出典： Invitation til fødselsdag i Louisianas Bornehus

４－３－１．スタジオ

自由制作では，スタジオごとで異なる創作活動ができる。対象は主に４歳から16歳を想定しているが，制限があるわけではない。展覧会またはコレクションからテーマが選ばれ，各スタジオには，参考になる作品の写真が小さな展覧会のように壁に並ぶ。簡単な言葉や説明文も用意されている。例えば，「ポール・ケアホルム」展にちなんだ椅子デザインのスタジオでは，「空間rum」「形form」「素材materialer」とキーワードが壁にきれいにデザインされ並んでいた。どこに座るか，いつ始めるか，何を使うかなど決められたことはない。職員も教えるためにいる先生ではなく，子どもにも大人にも話し相手になり，道具の使い方など必要な場合に対応している。大人が展覧会を見ている間，子どもがここで時間を過ごすことも可能ではあるが，職員はベビーシッターではないので，まだ一人で遊べないような子どもは同伴の大人と一緒にいることが必要となる。

例えば，「マックス・エルンスト」自由制作のスタジオでは，ドイツから家族で初めてルイジアナに来た女の子ユーラ（11歳）[20]が，一人で夢中になってエルンストの『大きな助手Le grand assistant』という彫刻を写真を見ながら粘土で作っていた。その隣にはやはり一人で，粘土でエッフェル塔を作っていた女の子メリア（８歳）がいた。彼女はイギリスから来たが，デンマークに親戚がいるため毎年訪ねて来ており，その度にルイジアナに来ていると言う。このように学齢に達しているか，子どもハウスの利用に慣れているような子どもの場合，子どもだけで創作活動に励んでいる姿もないわけではない。

開催中の展覧会をテーマにしたものがスタジオＡとスタジオＢで，コレクションの作品をテーマにしたものがスタジオＣで行われていた。スタジオＡの「ポール・ケアホルム」自由制作では，デンマークを代表する家具デザイナー，ポール・ケアホルムの展覧会から，椅子を題材に様々な素材を使って模型を作ることができる。スタジオＢの「ビデオアート」自由制作では，展示中のビデオ作品画像のカラーコピーを切ったり貼ったりしてコラージュを作る。そしてスタジオＣでは，コレクションの作品をもとに，粘土で彫刻を作る「マックス・エルンスト」自由制作か，画用紙に水彩絵の具で描く「カール＝ヘニング・ペダーセン」自由制作に参加できる。

それぞれ，素材は種類も量も豊富にあり，大人も子どもと一緒に参加することができる。また，スタジオＡとＣの椅子やテーブルは四角く重厚な，そして暖かみのある木で出来ている。スタジオＢのテーブルと椅子は全体に軽やかで丸みがあり，椅子はアルネ・ヤコブセンのセブンチェアである。カラフルで明るいピンク・黄

色・オレンジなどが並ぶ。あるデンマーク出身の父親[21]は，「子ども用だから，汚れるからとプラスチックの製品ではなく，家具も材料も質の良いものを揃えている」と指摘する。ルイジアナの近くに住む母親[22]はこの点に関し，「展示室で最高の芸術を鑑賞したあと，プラスチックに囲まれるなんて考えられない」とコメントした。スタジオは子どもにも大人にも快適な設備となっている。職員は次の人がすぐに使えるように，席が空くとテーブルの上が整理され材料が揃っているか気を配っている。

また，思いっきり絵の具や粘土で制作できるように子ども用のスモッグも用意されている。そして１階の洗面所には６歳児が届く程度の低くて大きな洗面台があり，創作を終えた子どもが絵の具や粘土で汚れた手を自分でじっくり洗っている姿が見られた。

４－３－２．利用状況

ルイジアナの入場者は年間約50万人である。2005年の入場者526,182人のうち，18才未満は77,002人であり，これには学校プログラムの団体入場者25,583人が含まれている[23]。ルイジアナへの子どもの入場者が全て子どもハウスを利用するとは限らない。しかし，家族での利用が多いため，子どもハウスの利用者には，大人も多数含まれる。

スタジオの座席数から自由制作の同時利用者数を推定すると，スタジオＡが約44人，スタジオＢが約30人，スタジオＣが約32人で合計約106名となる。テーブル以外のスペースもゆったりしているので，ベビーカーを置く事も予備の椅子や壁際のベンチに腰掛けることも可能である。

ヴィーヨの説明では，季節により子どもハウスの利用者数には大幅な変動があり，夏の６月・７月・８月は週末と平日の区別なく世界中から家族が訪れ一杯になる[24]。他の季節は，一般的に週末は満席状態になるが，平日は週によって異なる。ニールセンによると，子どもと親あるいは祖父母で来るパターンが多いということである。

「ポール・ケアホルム」スタジオではデンマーク在住の祖母がアメリカから遊びに来ている孫を連れて来ていた[25]ピンクのワンピースを着た５歳ぐらいのルシアは歌いながらテーブルに用意された素材を次から次と試し，椅子とテントの模型を作った。祖母は「デンマークにも孫はいますが，まだ連れてくるには小さすぎるので普段はルイジアナに一人で来ています」と語る。

また，イギリスからの家族[26]は大人２人とハンナ（３歳），マーサ（４歳），ロッタ（７歳）で来ていた。大人２人がそれぞれ熱心に作っている横で子ども達が「これと同じのを作って！」と注文したり，手伝ったりして楽しんでいる。ロッタは自分でも挑戦し，「これをこう立てたいの」と父親に相談しながら作っている。彼女の父親と叔母にあたる２人はルイジアナに近いヘルシンオアの地域で育ったので，子どもの頃からルイジアナに来ていたという。父親は「今はロンドンに住んでいるため夏になると里帰りし，ルイジアナにも毎年子どもを連れて来ています。自分が子どもの頃は子どもハウスはなかったけれど，ミロやジャコメッティの作品を見たことなどは覚えていますよ」と話しながらも制作の手は止まらない。叔母は「ここは，あらゆる年齢の子どもが楽しめると思い

ます。展示が難しくても作品と同じような素材を見たり使ったりしているうちに，展示とのつながりがわかるようになっていくのでは」と自由制作と展示の関係に言及した。

スタジオでは展覧会や作品をどう感じたか自分で受け止めてから作る事が大切なので，まず展覧会を子どもと見てから参加することを職員は利用者に勧めている。この点が，家や学校でできることと異なり，作品が並ぶルイジアナだからできることである。ルンゴがプログラムを開発した際に目標とした「展覧会あるいはコレクションとプログラムのつながり」である。ただ作るのではなく，まず家族で作品鑑賞を共有した上で，一緒に創作をすることは，交流と学習の機会が多様に用意されているといえるのではないだろうか。

ヴィーヨは，「家では親が子どもと一緒に何かに夢中になるような時間を持つのが難しいけれど，子どもハウスでは皆がリラックスして楽しみ，親子のコミュニケーションも深まる」と説明する。またニールセンもここでの時間を「親や祖父母と話しアイデアを交換しながら作る交流の時間」であると考えている。

「一緒に作ったり，話しをしたりできるから理想的な場所。それに家では散らかるからできないこともここでは出来るわ」と，娘カロライン（10歳）と一緒に粘土で作品を作成中の母親[27]は言う。子ども時代にルイジアナの訪問経験を持つ彼女にとって，「当時はまだ子どもハウスはなかったので，こんなに面白くなかった」そうだ。上の娘ヘリエンダ（14歳）は，家族と少し離れた窓際のベンチに腰掛け人物画を鉛筆で丁寧に描いている。時々携帯電話でメールをやりとりしている現代っ子である。「小さい頃からよく来ているわ。ルイジアナの中ではここが一番好き」と言う。

このように自分が子どもの頃，親に連れられて来ていた人びとが，親として子どもを連れてルイジアナに来ている。三世代に渡って訪問されていることになる。時には三世代揃っての訪問もある。

粘土造形を行っていたデンマーク人の姉弟は，カロライン（７歳）とオスカー（６歳）[28]。横のベンチで見守っているのは彼らの母親と祖母であった。近くに住む家族であり，子ども達は学校でもルイジアナに来ているので，彼らにとって今回が６－７回目の訪問になるらしい。母親は「いつも景色の良いカフェで昼食をとり，芝生の丘を転がって遊び，子どもハウスにきて半日を過ごして帰ります」とルイジアナでの過ごし方を語った。このような家族にとって，ルイジアナは様々な体験を与えてくれる場所となっているのだろう。

スタッフおよび限られたビジターのインタビューおよび観察ではあるが，確認できた点は以下の３点にまとめられよう。１．比較的近くに住む家族や近くに親戚がいる家族のビジターにとって，子どもハウスに来ることは習慣になっている。ニールセンの指摘する通り「繰り返し来る家族が多い」と言えるであろう。２．大人は子どもの両親あるいは祖父母であることが多い。特に，自分が子ども時代にルイジアナへ来た経験のある親であることが多い。３．美術館ならではの展示鑑賞そしてそれに関連する創作活動を通して，家族で交流と学習を行っている。詳細な調査を行わなければ学習効果の把握派困難であるが，ここでは構成主義に基づき，「参加」や「交流」が能動的な学習を導くと捉える

ことで，展示に結びついた作品制作への参加および家族との交流を通して学習していると考えられるであろう。

5．結論および展望

ルイジアナが家族にとって魅力的な存在である理由の一つに，子どもと一緒に大人も楽しみ充実感を得られる家族参加型プログラムの存在があるといえよう。子どもハウスの快適な環境や自由制作における活動の選択肢は，参加意欲を高めることに貢献していると考えられる。そして，子どもハウスがルイジアナを訪問する目的の一つになり，繰り返し訪れる家族も多いのではないだろうか。また，家族で自由制作に挑戦することで，協力，相談，支援，激励，賞讃といった交流が生まれる。同時に，参加者はルイジアナの展覧会やコレクションと向き合った制作を試みているのである。自由制作のためのテーマや材料，道具の選定，スタジオ内のテーブルや椅子の配置，制作のヒントとなる展覧会や作品の情報の提示，参加者制作作品の展示方法などは，交流と参加により利用者を能動的な学習に導くよう注意深く用意されているようである。そして，それは学習普及部の職員達による専門的な知識と経験に支えられているのであろう。

また，家族での訪問は，子どもだけでなく親の意思が大きく影響していると言えよう。実際に子どもを連れて来ている親には，子どもの頃ルイジアナを訪れていた割合が高い。親の経験から家族の訪問が始まり，親も楽しめる家族参加型プログラムなどを目的に訪問が繰り返されることはビジターの増加・維持につながり，長期的には次世代ビジターへも繋がっているようである。

さらに，学習普及部では学校プログラムや成人プログラムでも多様な参加型プログラムが実施されている。学校プログラムは職員と学生達の対話を軸に行われる。「学校サービスSkoletjenesten」[29]との協力により年間25,000人もの学生を受け入れている。

また，成人プログラムでは，政府機関や企業から派遣されたグループに対し，ガイドツアーとワークショップの提供を行い，好評を得ているということである。そして実験的に実施した赤十字難民キャンプの子ども達へのワークショップも，今後継続的に提供することが決まったという。このようにルイジアナの参加型プログラムは，仲間意識やアイデンティティーの育成など社会の新しいニーズに対応し，コミュニケーション機能を拡大しているようである。

これからの美術館経営において，ビジターを増やし維持する一つの方策として「家族参加型プログラム」の果たせる役割は大きい。次世代を視野に入れ，長期的に地域コミュニティーに根ざすことを可能にするからである。

〔投稿受理日2006. 9.26／掲載決定日2006.11.30〕

注

(1) 本稿では，「家族」とは親子だけではなく，保護者である大人と同行する子どもの集団をさす。ただし，学校などの団体は含まない。そして「子ども」は国連「児童の権利条約」第一条[UNHCHR 1989]に従い18歳未満とする。

(2) 「家族連れと子供は，児童博物館において最も多く見られ，動物園と科学技術センターがそれに続いている。自然史と歴史博物館では子供の姿はやや少なくなり，美術館では家族連れや子供の姿をみかけることはあまりない。ちなみに科学センターでは，家族連れが来館者の80%を占めて

いるのに対し，美術館では10%以下になっている[フォーク，ディアーキング 1996: 29]」。

(3) 各国を代表する委員会により構成されていたが，会員制度を導入し会員の選挙による意思決定が始まった[Murphy 2004: 3]。

(4) 1916年Gilmanは，展示を見るため膝まずいたり，かがんだりしているビジターの行動を写真に撮り分析した。ビジターの肉体的，心理的要素を考慮した展示でなければ，ビジターは疲労してしまい，表面的な鑑賞しかできないと結論し，その疲労を「博物館疲労」と呼んだ[Screven 1993: 7]。

(5) 1901年に個人のコレクションを元に創設された合衆国オハイオ州にある美術館。

(6) パリのポンピドゥー・センターは，1977年の開館に先立ち1975年より「子どものアトリエ」を始めた。自由に鑑賞する目を育て，創作意欲を刺激することを目的に，ダニエル・ジロディーと芸術家により20世紀美術の教育プログラムが開拓された[Bertrand 2000: 67]。現在，アトリエおよびガイドツアーは月に15－30本あるが，アトリエの利用はその時間に限られている。

(7) 40カ国以上に拠点を持つ天窓のメーカー，ベルックス社Veluxが設立した財団。文化・芸術・社会・科学の分野に助成を行っている。http: //www. velux. com/About_Velux/Social_Responsibility/VELUX_Foundations/（18 Sep. 2006）.

(8) A５版，16頁，全カラーの冊子で，年間３冊発行されていた。1997年の10月に発行された10号を最後に，モビレンの会員制度は終了となった。会員・入場部のカトリン・モルストロムKatrine Mølstrøm によると，終了は会員誌の印刷費など経済的理由のためであった。それ以降，大人の「ルイジアナ・クラブ」会員の子どもおよび孫には入場無料のパスが発行された。これは18歳未満の入場が無料になる2006年１月１日まで継続した。

(9) 「会員制度・入場部」による情報。

(10) 2006年９月まで産休のため，コーディネーター，クリスティン・ターブ・イェンセンKristin Terp Jensenが部長代行。

(11) Danmarks Statistik www. Statbank. dk FOD4.（18 Sep. 2006）

(12) 1960年代にイェンセンは，労働時間の短縮によりレジャーの時代が到来し，レジャー産業が人びとを均一化した消費者にしてしまうことに危惧を抱いた。「標準化してゆく社会に対して歯止めをかける重要な役割をアートが果たせる」と述べている[Weschler 1982: 55]。

(13) http: //www. unhchr. ch/html/menu3/b/k2crc. htm（18 Sep. 2006）

(14) 2006年８月13日から18日にかけて行った。

(15) 2005年12月15日付けで博物館法が一部改正され，2006年１月１日より国立および国の認可を受けている博物館は18歳未満の入場を無料にすることが定められた。Kulturministriet http: //www. kum. dk/sw1545. asp（18 Sep. 2006）

(16) 特に名称がないため，本稿では便宜上面積の大きいスタジオからA，B，Cと呼ぶ。

(17) 開設時の，メニューにはサンドイッチなど食べ物もあった[Louisiana 1994b: 4]。今では限られた飲み物もセルフ・サービスとなっている。

(18) Formidlingという名称である。英語の表記ではEducationが使用されていた。しかし，教育はundervisningであり，formidlingの意味は「調整・媒介，コミュニケーション・送信，促進・伝播・普及」である[Axelsen 1995: 236]。この部署の役割も考慮し，本稿では「学習普及部」という名称を使用する。

(19) デンマークは500以上の島から成るが，ユトランド半島，東のシェラン島，その間のフュン島に大きく分けられる。http: //www. visitscandinavia. or. jp/jp/denmark/general_information. aspx（18 Sep. 2006）

(20) ユーラとメリアには，８月15日（火）13: 30頃，スタジオCでインタビュー。

(21) ８月14日（月）14: 00頃，スタジオAでインタビュー。

(22) ８月14日（月）14: 20頃，スタジオCでインタビュー。

(23) 「会員制度・入場部」による情報。

(24) たとえばスタジオAで制作された椅子の作品は，持ち帰らずに特別の展示コーナーに飾ることもできる。作者の国名が明記されていた32点（８月16日）の内訳は，デンマーク８点，スウェーデン７点，フランス５点，ドイツ２点，ノルウェー２点，イギリス２点，他ルクセンブルク，オランダ，ベルギー，イタリア，中国，ブラジルが各１点であった。

(25) ８月14日（月）13: 30頃，スタジオAでインタビュー。

(26) 8月14日（月）14: 00頃，スタジオAでインタビュー。

(27) 電車で10分程の地域に住む家族。8月14日（月）14: 30頃，スタジオCでインタビュー。

(28) 近所に住む家族。8月14日（月）14: 20頃，スタジオCでインタビュー。

(29) 「学校サービス」は学校が文化施設を定期的に利用するために設立された。コペンハーゲン・アムト等地方自治体が出資している。http: //www. skoletjenesten. dk/sider/Profil/index. html（18 Sep. 2006）

参考文献

Axelsen, Jens. 1995. Dansk-Engelsk Ordbog. Glydendals

Bertrand, Valère. 2000. Centre George Pompidou. *Connaissance des Arts,* H. S. n° 146

Carey, James. 1992. Communication as Culture. New York: Routledge

Gauthier, Anne Hélène. 1996. The State and the Family. Oxford: Oxford University Press

Hein, George. 1992. Constructivist Learning Theory. in Durbin, G. ed. *Developing Museum Exhibitions for Lifelong Learning.* Museum & Galleries Commission

Hood, Marilyn G.. 1983. Staying Away: Why People Choose Not to Visit Museums, *Museum News*, April 1983

Hooper-Greenhill, Eilean. 2000. Changing Values in the Art Museum. *International Journal of Heritage Studies,* Vol. 6. No. 1. pp. 9-31

ICOM 2001. Development of the Museum Definition according to ICOM Statutes 1946-2001. in *http: //www. museum. or. jp/icom-J/hist_def_eng. html*（18 Sep. 2006）

Kulturministeriet. 2001. "Museumslov - Lov nr. 473 af 7 . juni 2001" in http: //www. kum. dk/sw1545. asp（18 Sep. 2006）

Knudsen, Lisbeth B. . 1999. Recent Fertility Trends in Denmark. *Research Report*, November 1999. Danish Center for Demographic Research

Louisiana Museum for Moderne Kunst. 1958. Louisiana Skriften, NR. 1 , Gyldendal

— 1978. *Louisiana Revy*, 19. Årgang nr. 1 . August 1978

— 1979. *Louisiana klubben*, No. 14

— 1983. Louisiana 25 år. *Særnummer af Louisiana Revy* 24, Argang nr. 1 . 14. August 1983

— 1987. *Louisiana klubben,* No. 45

— 1994a. *Louisiana klubben*, No. 71

— 1994b. *Mobilen*, Åbningsnummer September 1994

— 1995a. *Mobilen,* Nr. 2 , April 1995

— 1995b. Louisiana Samling og bygninge.

— 1998. Louisiana at 40 The Collection Today. *Louisiana Revy Special Issue*, Vol. 38, No. 3 , June 1998.

— 2006a. Børnehus leaflet

— 2006b. *Louisiana Magasin*,. Nr. 21, Maj 2006

Murphy, Bernice L. . 2004. The Definition of the Museum. *ICOM News,* No. 2 2004

Russell, John. 1994. In Denmark, a Boredom-Proof Museum for Children, *New York Times*, October 16

Screven, C.G.. 1993. United States: a science in the making. *Museum International:* visitors, No. 178

UNHCHR. 1989. "Convention on the Rights of the Child" in http: //www. unhchr. ch/html/menu 3 /b/k 2 crc. htm（18 Sep. 2006）

Vejlstrup, Tove. 2002. Manuscript of the presentation at Mature Institution seminar, Sweden

Weil, Steven E. . 2004. Rethinking the Museum; An Emerging New Paradigm. in Gail, A. ed. *Reinventing the Museum.* Walnut Creek: AltaMira Press

Weschler, Lawrence. 1982. Profiles: Louisiana in Denmark, Knud Jensen, *New Yorker.* August 30, 1982

イコム日本委員会 2006.『平成18年度イコム大会報告書（第20回韓国ソウル大会）』

木下綾 2006.「ビジター指向の美術館：ルイジアナ近代美術館を事例として」社学研論集第八号

フォーク，ディアーキング著 高橋順一訳 1996.『博物館体験：学芸員のための視点』雄山閣